

# 新学習指導要領の展望と新しい教科書

文英堂編集部

2013年より施行される新しい高等学校学習指導要領に向けて、各校でもカリキュラムの検討が始まっていることと思います。検討を担当されることになった先生方のお話を伺いますと、とにかく分からないことが多い、教科書がどのようなものになるのか分からないとカリキュラムを考えにくいなど、お困りの方も多いようです。

検定合格以前での白表紙本の閲覧・配布などのような事前の情報公開は文部科学省より厳重に禁じられていますので、具体的な本の形などでお示しすることは当分できませんが、本稿ではこれまでの新指導要領に関連した記事の総まとめを行い、新しい教科書像を展望したいと思います。ただ、あくまで小社の考えに過ぎないことをご理解ください。

## 1. 日程

まず、今後の日程について再確認します。

### ■高等学校英語関係日程（予定）

2012年4月	「コミュニケーション英語Ⅰ」「英語表現Ⅰ」「コミュニケーション英語基礎」「英語会話」の見本本を各学校にお持ちします。
2013年4月	「コミュニケーション英語Ⅰ」「英語表現Ⅰ」「コミュニケーション英語基礎」「英語会話」使用開始。 「コミュニケーション英語Ⅱ」「英語表現Ⅱ」見本本。
2014年4月	「コミュニケーション英語Ⅱ」「英語表現Ⅱ」使用開始。 「コミュニケーション英語Ⅲ」見本本。
2015年4月	「コミュニケーション英語Ⅲ」使用開始。

## 2. カリキュラム編成にあたって

### ■履修上の注意点（順序）

「コミュニケーション英語Ⅰ」（標準単位3）は、外国語（英語）を教える以上、必ず履修させなければなりません。生徒さんがついていけるならば、2単位に減らすこともできます。また学校の事情による単位増の可能性もあります。

「コミュニケーション英語基礎」（標準単位2）もまた1単位に減らすことが可能です。「コミュニケーション英語Ⅰ」と同学年で採ることはできますが、並行学習は認められていません。「基礎」終了後でなければ、「Ⅰ」の学習は始められません。

また、「コミュニケーション英語Ⅱ」（標準単位4）は「Ⅰ」の終了後、「コミュニケーション英語Ⅲ」（標準単位4）は「Ⅱ」の終了後に履修することになっています。「英語表現Ⅰ」（標準単位2）と「英語表現Ⅱ」（標準単位4）の関係もこれらと同じです。

「英語会話」（標準単位2）の履修時期については、特に規定はありません。

### ■4技能と単位数を中心に

#### ○コミュニケーション英語

「コミュニケーション英語」系統を「総合科目」ととらえて、現行課程の科目「英語Ⅰ・Ⅱ」と比較しますと、総単位数は11で、現行の7単位に比べ、大幅増となります（「基礎」まで加えれば13単位）。

「英語Ⅰ・Ⅱ」を、未だに大昔の「リーダー」という名で呼ぶ先生がいらっしゃいます。このような状況に業を煮やして（?）、30年以上も使ってきた科目名を捨て、「コミュニケーション英語」という名称に切り替えられました。総合科目という位置づけは変わりませんし、リーディングが中心的な活動になることは文部科学省も否定はしていませんが、それらに終始することを排するという意志を表したものと理解できます。

リーディングが中核であることを考慮して、「英語Ⅰ・Ⅱ」の7単位に専門科目である「リーディン

グ」の4単位を加えると、新課程の「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」と同じ11単位となります。「リーディング」という専門科目はなくなりましたが、「コミュニケーション英語（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）」の中に引き継がれているものと見なすことができるかもしれません。ああやっぱり「リーダー」なんだ、と思われる先生もおられるかもしれません。

いずれにせよ、大部分の学校では「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」が英語のカリキュラム編成の出発点となり、柱となると思います。進学校以外では、現在と同じく「Ⅲ」または「Ⅱ・Ⅲ」を履修しない学校があるでしょう。

○英語表現

新しい指導要領で「英語表現Ⅱ」の説明を読むと、ディベートを目標としており、現行課程の「オーラル・コミュニケーションⅡ」に通じるところがあります。ご承知のように、「オーラルⅡ」の履修者は全国で10万にも足りません。いろいろな事情があると思いますが、指導がたいへんであることや受験に直結しないことなどが主因でしょう。似たような科目であることから、「英語表現Ⅱ」についても同

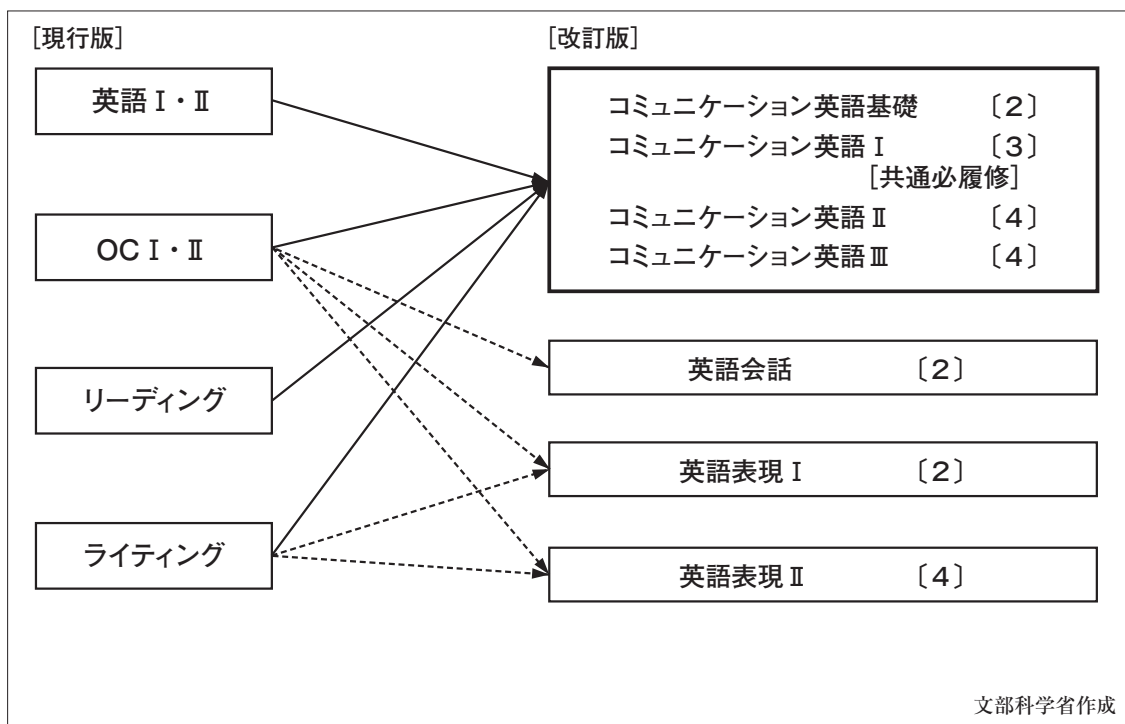
様にお考えの先生もいらっしゃるかもしれません。

ところが、これら二者には大きな違いがあります。「オーラルⅡ」が選択科目の一つだったのに対して、「英語表現Ⅱ」は中核的な科目なのです。単位数だけから考えると、「英語表現Ⅰ・Ⅱ」の「2単位+4単位」は、現在の「オーラル・コミュニケーションⅠ」+「ライティング」という基本科目の「2単位+4単位」に一致するのです。しかも、進学校にとっては、「英語表現Ⅱ」を採らないと、他にカリキュラムを埋める科目がありません。よくも悪くも、あまり悩む必要はないのです。科目の中身にかかわらず、採るしか道はないでしょう。

他の学校では、「英語表現Ⅱ」の代わりに「コミュニケーション英語基礎」（2単位）と「英語会話」（2単位）を採るとか、他の科目の単位数を増やすなどしてカリキュラムを組むことができます。もちろん、学校設定科目でカリキュラムを埋めることもできますが、現状では少数派です。

3. 注意すべきいくつかの点

以下は、カリキュラム編成に直結するわけではありませんが、新課程について考える際に考慮に入れ



ておきたい点です。

■新入生の習熟度

小学校で外国語活動を開始した上に、中学の各学年で3単位から4単位に増えることから、高校入学時点の英語力は相当の実力アップが見込めるというのが文部科学省の見解です。中学の3年間で計3単位増えるということは、現行の年3単位で考えれば1年余計に勉強するのと同じ意味があるのだから当然のことだと言っています。

実際にどの程度の効果があるか今の時点でははっきり言えませんが、少なくとも若干の上昇は見込めるのではないのでしょうか。特に学校での指導が増えれば習熟度の上昇が見込めるだろう中堅クラスの生徒の力は、伸びる可能性があると思います。また増えた分が発展や増量よりは丁寧な指導と定着に向けられれば、今まで落ちこぼれていた層が救われるかもしれません。

■1,2年目における旧課程とのギャップ

中学校では2012年に全学年で一斉に新課程に移行します。旧課程の終盤において、中学校の先生方は新課程を見据えた指導をしています。英語の場合理系科目と違ってここまでやっておけば新課程に対応できるという明確な線引きができません。また改善の中核である単位増が実現しなければ、移行の実を挙げるのは困難です。

移行措置が不十分な場合、新課程1年目の2013

年に入学してくる新入生は、1年間しか新課程の学習をしていないのに新課程で3年間学習したことを前提に作られた高校教科書で勉強することになります。たとえば語彙面では、900語程度の習得が目標だった生徒が1,200語習得済みを目前提とした教科書で勉強しなければならないということです。したがって新課程1年目および2年目には、そのようなギャップのあるかもしれないことを認識した上で指導計画を立てる必要があります。

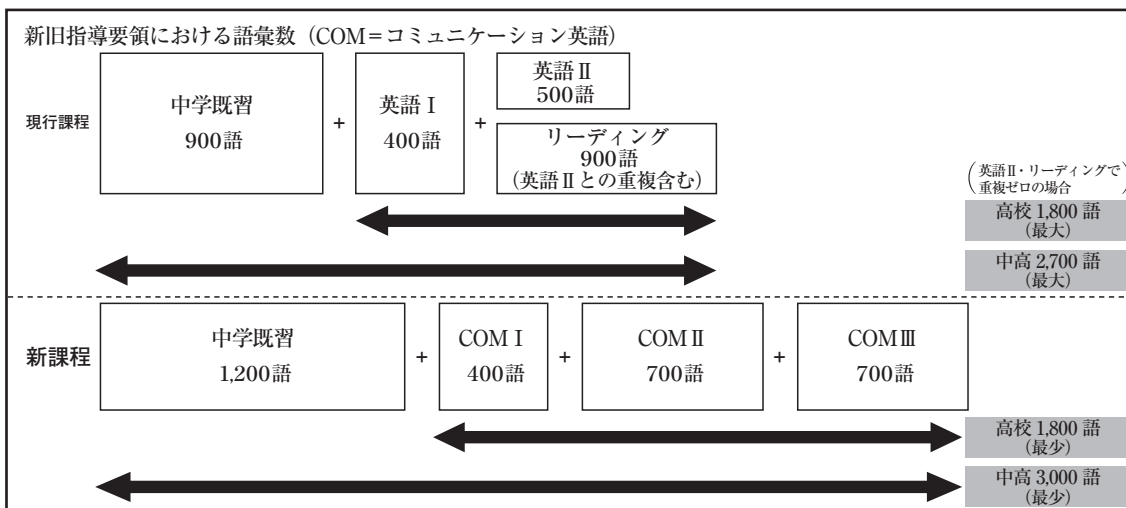
■語彙の増加

新指導要領では、以下の図のように大幅に語彙数が増えました。しかし、ここで問題なのは数値自体の変化より数の意味の転換です。これまで、学習指導要領が示す語彙数は事実上の上限でした。この数をあまり超えていると、検定意見が付いて減らさざるを得ませんでした(オプション扱いにすれば認められるなど、運用面ではある程度柔軟でしたが)。

ところが新指導要領では、要領自体が「教えるべき最低限のラインを示すもの」であるという位置づけが明瞭にされ、語彙数についても今まで上限であったものが逆転して下限になりました。これによって、次のような影響が考えられます。

○難しい教科書はより難しくなる?

指導要領に示された語彙数が教科書出現数の上限を意味するという点は、ここ数十年間一貫して変



わりませんが、20年ほど前までは今ほど厳しく遵守を求められませんでした。たとえば指導要領で500語と示されていても、800語以上の語彙を含む教科書が検定を通過していました。今回初めて下限が示され、上限が撤廃されましたので、上位校向けの教科書は大幅に語彙を増やすことができるようになりました。以前のような800語だとか、場合によっては1,000語も新語の含まれるような教科書が出てくる可能性がなくなりました。

○やさしい教科書も難しめに？

反対に習熟度が低い生徒さん向けの教科書は、編集が難しくなります。現在の指導要領下では中学既習と見なす語が500語以下、英語Ⅰ新出語が200語以下というような教科書が発行されていますが、新課程ではこのような本は検定を通らないでしょう。少なくとも表面上はこの2倍以上の語彙を含む教科書ばかりになります。

もちろん、各教科書の著者は習熟度の低い生徒さんが無理なく学べる教科書を作る工夫をすることはと思いますが、上のような条件がありますので、教科書がある程度難化することは避けられないかもしれません。

## ■文法の扱い方の変化

○すべての文法事項を「コミュニケーション英語Ⅰ」で学習

新指導要領ではすべての文法事項を「コミュニケーション英語Ⅰ」で扱うことになりました。この「すべての事項」という点に関して、心配されている先生方もいらっしゃると思います。ここで言う「すべての事項」とは、指導要領において「文法事項」として示された「不定詞」「関係代名詞」「関係副詞」「助動詞」「itが名詞用法の句・節を指すもの」「動詞の時制」「仮定法」「分詞構文」という項目名を指しています。「指導要領解説」では、さらなる細目を示している「事項」もありますが、たとえば「仮定法」に関して「各科目に応じたふさわしいものを指導する」とあるように、示された細目が「コミュニケーション英語Ⅰ」で扱うべきだと言っているわけではありません（そもそも「解説」の細目はあくまで例示に過ぎないのですが）。

つまり「指導要領」が規定しているのは「コミュニケーション英語Ⅰ」でたとえば「仮定法」を全く外すことはできないということであって、「ifを含まない仮定法」「as ifを用いた仮定法」など細部の扱いについてまで「コミュニケーション英語Ⅰ」で学習せよと規定したものではない、ということです。難度が高い教科書は、現行課程でも上記の「すべての事項」のほとんどを扱っています。せいぜい「仮定法」または「分詞構文」を英語Ⅱに回している程度でしょう。したがって、ここでも今までと違う対応を探る必要がより高いのは、習熟度が低い生徒向けの教科書であり指導です。

○「コミュニケーション」を支える文法

指導要領では、文法は「言語活動と効果的に関連づけて指導する」とも述べられています。これは文法知識の単なる暗記に終始せず、生徒が授業中に行う英語を使った活動と一体で指導されなければならないという意味です。教科書も文法を扱うことを優先し、それに合わせて教材を配置するのでなく言語活動を優先して、それに合った文法事項を学ぶことができるよう求められています。当然そうあるべきでしょう。現在の教科書もこの考え方から外れているとは思いませんが、いっそう言語活動との連関が重視されることになるでしょう。「すべての事項」を扱うことに加えて、活動も絡めて、ということですから、それぞれの文法項目について細部まで扱うことはとてもできません。したがって「体系的な」文法学習が必要だとお考えの先生方は、「すべての事項」を「コミュニケーション英語Ⅰ」で扱うからといって別立ての学習が不要になるのではなく、むしろ現在と同じあるいはそれ以上に必要と考えられるかもしれません。

他方、新課程では「総合教科書」が現状の2冊7単位から3冊11単位になりましたので、2～3年生になれば文法を学習する時間を今より増やすことができるかもしれません。また多くの学校で1年生で学ぶであろう「英語表現Ⅰ」に、今までの「オーラル・コミュニケーションⅠ」にはなかったライティングの要素が加わりますので、自然にそちらでも文法学習の機会が生じるだろうと予想されます。

反対の面としては、「英語表現Ⅰ」が「オーラル・

コミュニケーションⅠ」より「重く」なるので、現在「オーラルⅠ」の時間を一部削っているように「英語表現Ⅰ」を削って文法の体系的学習の時間を確保するというやり方は難しいかもしれません。

○「文型」から「文構造」へ

新指導要領では、中学校でも高等学校でも「文型」という言葉を避け、「文構造」という言葉を使っています。これは「型」によって分類するような指導でなく、文の構造自体に目を向けることを意図したためということです。「高等学校指導要領」に具体例は示されていませんが、「中学校指導要領」に示された基本的な「文構造」の例を見ると、現行課程までの「文型」と実質的にはほとんど変わりません。しかし、すべての文を「5文型」に分類しないと気が済まないような指導法は、やはり避けなければなりません。

■英語で授業

新指導要領が公表されたとき、「授業を英語で行うことを基本とする」ことに注目が集まりました。教室内で全く日本語を用いないことになるかのようには報道されたこともあったと思います。また教える側の問題としてとらえられ、現在の日本でそんなことができるのか、という疑問も出ました。

しかし、「英語で授業する」ことの主眼は、教師がどうこうということではなく、生徒がより多く英語を使うようにすることにあります。文法の説明も英語でやれとか、日本語訳をすべて排除せよというような「日本語禁止」に焦点があるのではありません（もちろん、生徒により多く英語を口にさせるためには、教師の側もそれなりに英語を話す必要があ

ることは言うまでもないことですが）、また「英語で授業を行う」とは指導法として述べられているのであって、それによって教科書をどう変えろというような問題ではありません。したがってこの規定によって、英語の教科書から日本語が一掃されるわけではありません。そのような教科書も出てくるかもしれませんが、各教科書会社の判断に委ねられているのです。

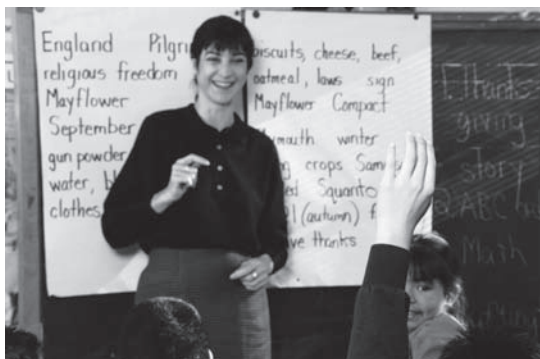
■分量の増加

すでに報道されているように、義務教育の新課程教科書は20%から30%程度厚くなっています。難しい部分が増えただけでなく、丁寧な説明や繰り返し学習のためにページが割かれています。当然ながら、この流れは高校の教科書にも及ぶでしょう。

ただ高校の英語の場合は入学時点での習熟度の差が大きく、その幅に応じた多様な教科書が用意されますので、対象とする生徒さんの習熟度によって厚さへの考え方も変わってきます。おおざっぱに言うと、上位校であればある程度厚くなっても指導に困難はないでしょうし、反対に、教科書1冊をやり切ることには固執しない下位校にとっても大した問題ではないかもしれません。

しかし、その他の多くの学校では、現在の量の教科書を1冊上げるのにも相当な苦勞をされていると思います。いかによい意図であろうと、増量は歓迎したくないとお考えの先生もいらっしゃるかもしれません。教科書著者としては、そのような現実を踏まえ、指導しやすく学習しやすい教科書を目指すことになると思います。

作り手側の事情としては、定価の問題との絡みもあります。通常の商品は、値段と付加価値には密接な相関関係があります。付加価値の高い商品を作って定価を高く設定するか、多少付加価値を下げて安くするか、値段設定はものを作る際の最も重要なポイントの一つです。ところが日本の教科書の場合、出版社は値段を決めることはできません。オールカラー200ページの教科書でも、モノクロ150ページの教科書でも、同じ科目の教科書であれば、現実には同じ定価で販売されます。しかも日本は、国家予算の中で教育費が占める割合が世界的にも最低レベルです。そのことが関係するかどうか分かり



ませんが、教科書にはエッセンスを載せ、教員や生徒がいろいろな教材を加えながら学習するというスタイルを前提として、お金も動いてきました。

もちろん学校現場では、そのような位置づけにある教科書を前提とした指導法によって実績を上げてきたわけですから、このスタイルの是非を簡単に言うことはできませんが、いずれにしても今の時点で大幅に教科書を変え得る状況にはありません。ですから、網羅的に情報が載っていて指導者がその中から必要なものを選んで指導するとか、ワークブックの要素が入っていて繰り返し学習用に向いている、といった教科書がすぐさま実現するとは考えられません。教科書の値段は、本ができた後でほとんど一律に国が決めてきましたので、赤字になる可能性があるような教科書を作ることは困難と言わざるを得ません。

#### 4. 各科目の位置づけ

以下では、科目ごとの留意点を述べていきます。

##### ■コミュニケーション英語Ⅰ

この科目については、これまでに述べた諸項目で触れました。特に加えることはありません。

##### ■コミュニケーション英語Ⅱ

###### ○語彙

現行の「英語Ⅱ」と同じ単位数の中で、現在より200語多い700語以上を加えなければいけませんので、作る側も使う側も工夫が必要になります。現在の「英語Ⅱ」では新出語が300程度の本もありますので、「コミュニケーション英語Ⅰ」以上に習熟度が低い生徒向けの教科書は作り方が難しくなります。新語が主に読み物の中で出てくると考えた場合、簡単に言えば、1.4倍の語彙を学ぶためには現在の1.4倍の本文を読むか、本文が同量なら1.4倍の頻度で新出語が登場するような難度の高い文を読むこととなります。300語程度がちょうどいいとお考えの場合、2.3倍の語彙が出てくることとなります。

###### ○文法

文法については「コミュニケーション英語Ⅰ」で「すべての事項」を学習してきたわけですが、す

に述べましたように、この「すべて」とは発展事項も含めた「すべて」ではありませんから、「コミュニケーション英語Ⅱ」や「Ⅲ」で学習すべき事項はまだ残されていることとなります。「コミュニケーション英語Ⅰ」では現行課程の「英語Ⅰ」より多くの事項を学んでくることになると思いますから、必須事項は「英語Ⅱ」より少ないかもしれませんが、発展的な文法を扱うという点では現在と変わりません。一通り学習し終えたことをうまく利用して、今までの「英語Ⅰ・Ⅱ」で扱えなかった事項を扱ったり、違う角度から整理し直したりするなど、英語力増進に役立てたいものです。その一方で「コミュニケーション英語Ⅰ」での学習が駆け足になった場合は、定着度を上げるための繰り返し学習に時間をかけたいところです。

##### ■コミュニケーション英語Ⅲ

###### ○語彙

現在多くの学校では「英語Ⅱ」を2年生で、「リーディング」を3年生で学習しています。その点から「コミュニケーション英語Ⅲ」は「リーディング」の後継科目とも言えますが、もちろん相違点もあります。

「リーディング」は「英語Ⅰ」学習後に採る選択科目の一つでしたから、単語数にしても「英語Ⅰまでに学習した語に900語を加える」ものとされてきました（つまり、「英語Ⅱ」の新出語と重複することもありました）。今回は「コミュニケーション英語Ⅱ」のあとに学習することが決まっていますから、「コミュニケーション英語Ⅱまでに学習した語に700語を加える」こととなります。したがって900語から700語に減ったことは、全体を見たときに出現する語彙数が減ることを必ずしも意味しません（p.12 図表参照）。

###### ○その他

実際の社会生活において活用できるようにすることが目標であることが強調されている点も、現在の「リーディング」と異なるところです。また現在多くの進学校では、「リーディング」の授業を1学期末や2学期の途中で打ち切って受験向けの授業を始めています。これを可能にしている要因の一つは

「リーディング」の特性にあります。「リーディング」では、リーディング・スキルを除けば文法その他体系的に学習すべき要素において、基本的に新規の内容がありません。リーディング・スキルには他にも効率的な学習手段がありますし、途中で打ち切ってもかまわないとお考えの先生方も多くいらっしゃいます。ところが「コミュニケーション英語Ⅲ」は総合科目ですから、学習する要素がもっと多くなります。教科書の作成者は現在の教科書の使用実態に配慮するでしょうから、「コミュニケーション英語Ⅲ」の少なくとも後半に関しては学習しないと困る項目はおそらく入れないでしょう。しかし現在に比べれば「学習すると受験に直接役に立つ」項目が含まれている可能性は高いでしょう。

### ■コミュニケーション英語基礎

近年の指導要領では、この種の基礎科目は設定していませんでしたが、中学校から高等学校への学習の円滑な移行を図るため今回設けられました。

#### ○1単位履修の可能性

文部科学省の説明会でも、目玉の一つとして力を入れているように感じました。標準単位は2単位ですが、生徒の実態に応じて半分の1単位でもかまわないとわざわざ述べられたことも、多くの学校で履修してほしいという気持ちの表れかもしれません。この場合、たとえば英語が週3コマの学校であれば11～12週で1単位相当(=35時間程度)学習したことになりますから、夏休み前には終了します。

#### ○コミュニケーション英語Ⅰとの関係

この科目は「コミュニケーション英語Ⅰ」より前に履修するもので、並行履修はできません。1年生で「コミュニケーション英語基礎」だけを学習する学校では問題ありませんが、「コミュニケーション英語Ⅰ」もあわせて履修したいと考えている学校では、「コミュニケーション英語基礎」の学習が済んでからでない「コミュニケーション英語Ⅰ」の学習に入れなくなります。1年段階で英語を5単位採ることができる学校であれば、少なくとも数字上は「コミュニケーション英語基礎」(2単位)と「コ

ミュニケーション英語Ⅰ」(3単位)を1年間で学習することはできます。しかし「英語基礎」を検討する必要のある学校の多くで、5単位の確保は難しいかもしれません。その場合、「コミュニケーション英語Ⅰ」を2年生の途中まで引きずることになります。現在でも指導要領の標準単位の中で消化しきれずに学年をまたがって指導することもありますから、その点では同じですが、1年生で「コミュニケーション英語Ⅰ」を消化しきれないことを前提としてカリキュラムを組むかどうか考えどころです。このように悩む場合は、1年生では「英語基礎」を2単位と「英語会話」を2単位学習するという形も無理がなくていいかもしれません。

#### ○ブリッジ教材との比較

現在、いわゆる「ブリッジ教材」で何週間か学習してから、「英語Ⅰ」の学習に入る学校がたくさんあります。であれば、「コミュニケーション英語基礎」を1単位入れることは、実態に合ったいい考えかもしれません。ただ注意しなければならないのは、「コミュニケーション英語基礎」が「指導要領」の縛りを受けるということです。民間で自由に作るブリッジ教材のほうが現場の実態を反映している可能性がありますから、「コミュニケーション英語Ⅰ」のカリキュラムの中で「ブリッジ教材」を使うべきか、「コミュニケーション英語基礎」を1～2単位で入れるべきか悩まれている場合は、できれば「英語基礎」の教科書を見るまで決断しないほうがいいかもしれません。

また以前お伺いした学校では、履修科目名として「コミュニケーション英語基礎」を出すことが、学校の宣伝上マイナスになるかもしれないから採らないだろうとおっしゃっていました。現在も「リーディング」や「ライティング」を履修していないと生徒の募集上マイナスになる可能性があるから、という理由で学校の実態に合っていない科目を履修しているという場合もあるようです。外面への配慮は見栄から来るものと決めつけることはできませんが、検討すべき要素としてあまり上位に来るものではないことは確かでしょう。

## ■英語表現Ⅰ

この科目については、「2. カリキュラム編成に当たって」という項目で主に単位数の問題として簡単に触れました。「英語表現Ⅰ」は「コミュニケーション英語Ⅰ」以上にわからないと不安を漏らされる先生方が多くいらっしゃいます。「英語表現Ⅰ」という科目は、主に1年生が学ぶコミュニケーション科目という点から、現行課程の「オーラル・コミュニケーションⅠ」に当たる科目なのかという質問をいただくことがあります。一概に断定することはできません。

### ○英語表現全般

まず「英語表現Ⅰ・Ⅱ」という系統（あわせて6単位）について考えてみましょう。これを「総合科目」である「コミュニケーション英語」系統に対し、よりコミュニケーションに重きを置いた専門科目ととらえると、現行課程の科目では「オーラル・コミュニケーションⅠ・Ⅱ」と「ライティング」のあわせて10単位に対応することになります。つまり、この限定された範囲に関してのみ考えれば、現行課程に比べて単位数は減っているという見方も可能なのです。

### ○ライティング

「英語表現Ⅰ」は全6単位のうち最初の2単位です。おおよさばに言えば到達点の3分の1程度までを担います。ここで問題になるのは、ライティングという技能とリスニングおよびスピーキングという発話に関する技能の比重の問題です。先ほど確認しましたように、この三つの要素に重きを置いた専門科目としては4単位減になっています。受験対策という観点から、当面はリスニングやスピーキングよりライティングのほうが重要であり続けるだろうと予想するならば、この6単位の中で今までのライティング4単位と同じ成果を確保できるかどうかは重要なテーマになるでしょう。

ということから考えれば、特に進学校にとっては「英語表現Ⅰ」を「オーラル・コミュニケーションⅠ」と同様に「軽く」考えることは危険だということになります。ここでライティングをある程度やっておかなければ、あとが厳しくなる恐れがあり

ます。残る「英語表現Ⅱ」4単位の中で、ライティングをほとんどゼロからやり、しかもディベートも目標にするというのは実現困難かもしれません。

### ○スピーキング

スピーキングを考えると、それが日常会話中心なのか、内容ある会話であるのかが問題になります。このような区別は本来は意味がないのですが、日本人の多くにとって、英語に接する機会がせいぜい数週間の海外旅行程度に限られるのが現実です。それならば、これに対応することと、外国人と個人的に深く関わりを持つ中で内容あることを伝えるのに必要な会話能力を区別することには、ある程度合理的な根拠があると言えるでしょう。特に初歩的なコミュニケーション学習に関しては、分かりやすい区別です。

### ○「英語会話」との関係

現在の「オーラル・コミュニケーションⅠ・Ⅱ」という科目に関しては、これら2種のコミュニケーションの区別はあまり意識されていませんでした。おそらく指導要領の作成者は後者を目指したのではないかと思いますが、実際にできてきた「オーラル・コミュニケーションⅠ」教科書の多くは、むしろ前者だったと言ってよいでしょう。内容を伝えるための学習は「オーラル・コミュニケーションⅠ」の2単位ではなかなか難しいと思いますが、「オーラル・コミュニケーションⅡ」を学習する学校はごくわずかでした。この事実、内容を伝えることを目指すことがあまり受け入れられなかったことを意味しているのかもしれません。

新課程では、「英語会話」という科目が登場したことによって二者の区別が明確になりました。「英語会話」という科目は、海外旅行に出かけたときに役立つような実用英語、あるいはいわゆるサバイバル英語を学習することを目標にしています。そのような科目が別にできたからには、「英語表現」はより内容的なコミュニケーションを目指した科目であると断定してよいでしょう。

こう考えれば、「英語表現Ⅰ」は「オーラル・コミュニケーションⅠ」と単位数は同じだし、総合英語に対して並行的に学習する点も似ていますが、本



質的にはかなり違った科目になるかもしれませんが、もし現在の「オーラル・コミュニケーションⅠ」と同じような学習をすることを考えておられるなら、「英語表現Ⅰ」より「英語会話」のほうが近いかもしれません。もちろん、実際に発行される教科書がそのようになると断定はできませんが、

## ■英語表現Ⅱ

「英語表現Ⅰ」で培った表現する力を伸ばすことを目的とする科目です。「論理的に話す」などが求められていることは、前項で述べたように「英語表現Ⅰ」も含めて内容的なことを伝えるのが目標になっていることを裏付けます。

## ○カリキュラム

指導要領が発表された際には、この科目がディベートやディスカッションを大きな目標としていることが話題になりました。このような目標が従来の授業からするとかなり重荷に感じられることから、履修率の低かった「オーラル・コミュニケーションⅡ」の二の舞になる可能性があると言われることがあります。しかし、カリキュラムの項で述べましたように、現行課程では「オーラルⅡ」を履修しなくても、平均的な3年間の履修単位数である17を確保できたのに対し、新課程では「英語表現Ⅱ」を組み込まないと17単位にはなりにくいという問題があります。

## ○履修を回避できるか

「英語表現Ⅱ」の履修を回避しようとすると、「英語会話」を履修するとか、「コミュニケーション英語Ⅱ」や「コミュニケーション英語Ⅲ」の増単が必要となります。ただ現状では増単や減単に関しての教育委員会の見解が必ずしも全国一律ではないという声も聞きますので、思い通りに実現できるかどうか分かりません。また学校設定科目を入れることも考えられますが、これに関しても学校の希望が簡単に通るのかどうか不明です。

さらに、大学の受験科目として「英語表現Ⅱ」がどのような扱いを受けるかという点も気になります。大多数の大学では受験科目に入らないと思われるのですが、「英語表現」を「コミュニケーション英語」

に並ぶ柱と位置づけられるのであれば、一部の高い英語力を求める大学や学科では、この科目を課してくる可能性があります。いずれにせよ、現在の「オーラル・コミュニケーションⅡ」と同じように「黙殺」することができない科目となりそうであることは確かです。

## ■英語会話

「英語表現Ⅰ」の項で申し上げたように、会話能力の中でも生活上の会話能力向上を目指す科目です。海外での生活に必要な表現を使って身近な話題について会話する能力を養うことを目標としています。現在の「オーラル・コミュニケーションⅠ」に通じるものがありますが、より即効性や実用性が期待されています。

したがって修学旅行で海外へ出かけるような学校や、卒業後の実用英語に備えたい学校では2～3年生での学習が考えられます。他方、これまで多くの学校で会話を学習してきた1年生では即効性は必要ないように思います。しかし、その点では現行の「オーラル・コミュニケーションⅠ」も同様ですから、そこを割り切ることができれば、より実践的な分「オーラルⅠ」より楽しく学習できる科目かもしれません。

## 5. 新課程における履修パターン予想

さて、以上を踏まえまして実際に高校現場の先生方のお考えを見てみたいと思います。19ページの図は現行課程の主なカリキュラムと、小社で過去に行いました新指導要領に関するアンケートの集計結果です。

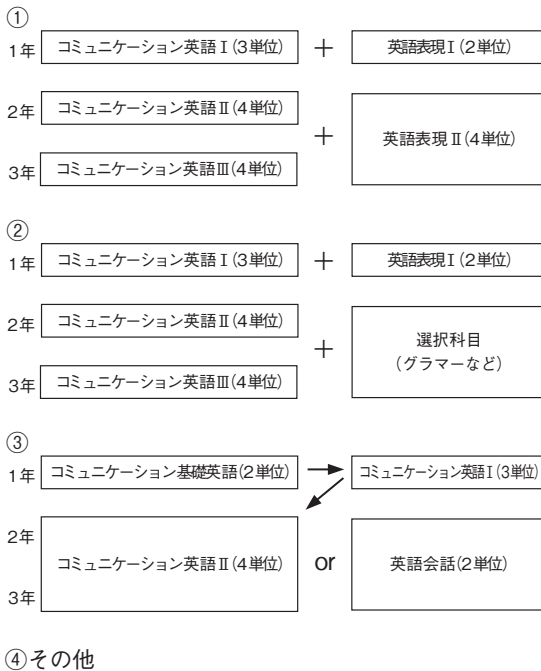
全体としては①と②のパターンが圧倒的です。①ではライティングだけではなく高度なレベルでのディベートやディスカッションが求められる発展的な新規科目「英語表現Ⅱ」が含まれますが、選択した先生の数はいちばん多かったようです。一方で②では指導要領にない科目を選択科目とすることが可能なのか、という問題点があります。今後カリキュラムの決定までに、熟慮が必要でしょう。数こそ多くはありませんが、③のパターンをとって中学英語との橋渡しのための科目と考えられる「コミュニケーション英語基礎」の授業をお考えの先生もいらっしゃ

やいました。その他、上の3パターンには当てはまらないカリキュラムをお考えの先生もいらっしゃいました。以下にその一部を紹介させていただきます。

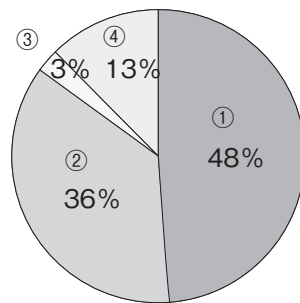
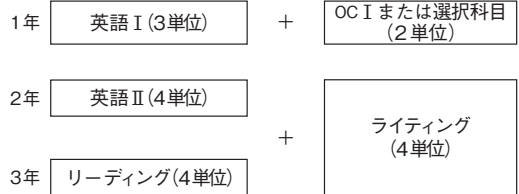
- 1学年でコミュニケーション英語Ⅰを4単位にする
- 1学年でコミュニケーション英語Ⅰを6単位にして、文法・会話等すべてやってしまう
- 1学年で基礎を2単位、コミュニケーション英語Ⅰを2単位で、表現Ⅰも並行して行う
- 1学年でコミュニケーション英語基礎を2単位、コミュニケーション英語Ⅰを3単位にする。英語表現Ⅰは2学年で使用、3学年で選択(文法など)

- 学校裁量科目で受験対応のカリキュラムにする
- 1学年は③で、進学コースのみ2学年で英語表現Ⅱを2単位、3学年で学校設定科目2～4単位
- 1学年は③で、2・3学年でコミュニケーション英語Ⅱを2単位ずつ、2学年で英会話2単位、3学年で英語表現Ⅰを2単位
- 1学年はコミュニケーション英語Ⅰを3単位と英語会話または英語表現Ⅰを2単位、2・3学年でコミュニケーション英語Ⅱを2単位ずつ、選択科目を2～4単位

[新カリキュラム予想]



[現行の主なカリキュラム]



(① 39名, ② 29名, ③ 2名, ④ 10名)